

(様式 17)

## 学位論文審査の概要

博士の専攻分野の名称      博士 (医 学)      氏 名   鶴川重和

主査      教授   玉城英彦  
審査担当者 副査      教授   寺沢浩一  
副査      教授   大滝純司  
副査      教授   玉腰暁子

### 学 位 論 文 題 名

在宅高齢者生活機能向上ツールを用いた家庭訪問による  
在宅高齢者の認知機能改善を目的とした介入研究

申請者は、2008 年より在宅高齢者生活機能向上ツール(Functioning Improvement Tool: FIT)を開発し、新ひだか町と日高町在住で 65 歳以上の特定高齢者や軽度要介護者 256 名に 3 ヶ月間の家庭訪問(対照群:家庭訪問なし)を実施し、認知機能に有意な改善効果が得られた。認知機能改善効果が FIT そのものの効果によるのか、会話を含む訪問の効果であるのか判定するために、2010 年に比較対照研究(対照群:日常会話を行う 30 分間/回の家庭訪問)を再度実施し、認知機能の改善は、FIT の直接効果であることを確認した。審査において寺沢教授より対象者に認知症患者が含まれるが、原因別に解析したのか否か、FIT は対象者一人で実施するのか否かについて、大滝教授より対象者全員が家庭訪問を受けたのか否か、介入中に健康相談を行った者を行わない者の違い、対象者の脱落の理由について、玉腰教授より今後の研究計画について、玉城教授より要介護者が増加している理由、費用対効果について質問があった。申請者は、認知症患者は 13 名しか含まれず、原因別に解析を実施することが難しいこと、FIT の実施については、介入者が対象者に FIT 記入方法の説明と記入の手助けを行ったこと、対象者全員が家庭訪問を受けたこと、健康相談の有無と認知機能については、今後の検討課題であること、脱落の理由として活動的な高齢者は多忙、要介護者は入院のために脱落したこと、平成 25 年度より特定高齢者のみと対象とした 1 年間の家庭訪問研究を計画していること、要介護者の増加理由として、高齢化と家族介護機能の低下、介護保険制度の認知が高まったことが考えられること、費用対効果は今後の研究課題とすることを述べた。

審査員一同は、これらの成果を高く評価し、大学院課程における研鑽や取得単位なども併せ申請者が博士(医学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと判定した。